

基底的事実としての儒と狭一照屋佳男先生の最終講義に寄せて

最終講義の中で照屋先生は、繰り返し「学問上の基底的事実」について述べられている。ここで詳しく述べるのは屋上屋を重ねることになるので、その内容については最終講義録を参照いただきたい。とにかく私はその「学問上の基底的事実」という言葉に最も深い感銘を受けたので、この論ではそれに関連する内容を述べてみたい。

照屋先生によれば、アウグスティヌスは信じるという意識化の度合いの低い営為を学問上の基底的事実としていたという。さらにアウグスティヌスは、知性を犠牲にすることなく、知ることと信じることを両立させていたという。アウグスティヌスに比すれば、私は何を学問上の基底的事実としているのか。自らに問うてみた。私の学問上の基底的事実は儒と狭である。

儒は、言うまでもなく儒教、もしくは儒学のことである。儒を呼び習わす場合、儒学と儒教の二つの呼び方があるのは、意識化の度合いの差を示しているように思われる。儒学は意識化の度合いの高い儒である。つまり、儒学とは中国歴代王朝の中で儒学者により代々受け継がれてきた、高度に精緻化、理論化された儒である。それに対して儒教は民俗であり慣習である。

そもそも孔子の儒は、「孔子、見たりしとき、嬉戯するに常に俎豆を陳ね、礼容を設く」（『史記』孔子世家）というように、けっして意識化の度合いの高いものではなく、むしろ土俗に近いものであったと私は思う。俎豆とは祭祀の供えものを意味している。俎は供えものの意で、豆は食する豆ではなく高杯を意味する。孔子は長じてからも、「俎豆の事は、則ち嘗て之を聞けり。軍の事は、未だ之を学ばざるなり」と言っているように俎豆の事、すなわち祭祀を重要なものとしてとらえている。祭祀は鬼神との交流を図るものであって、まさに意識化の度合いの低い「呪術」である。

また『詩経』は、後世の儒学で「聖典」とされたが、本来、単に純朴な民情を歌ったものである。晋の王褒は、『詩経』の蓼莪の詩を読むといつも涙を流したと伝わっている。それを後世の儒学者たちが断章取義し、「聖典」に祭り上げたのである。民情という意識化の度合いの低いものが、「聖典」という精緻化された意識化の度合いの高いものに変ぜられたと見ることができるのではなかろうか。

しかし、民情を反映した意識化の度合いの低い儒教は、二十四孝に示される孝のように理論化されたものではなく直接心情に訴えるものである。冬に筍を探す孟宗の逸話などは、まさに「信じるという営為」が実を結んだものだと言えよう。このような儒教は、啓蒙主義に近い儒学とは違い、意識化の度合いの低い「学問上の基底的事実」に十分なりうるものである。

ところで儒に対して侠という精神は、中国の正統な歴史の中に埋没してしまった精神である。現在の私達が、そのように埋没してしまった侠の精神を知ることができるのはひとえに司馬遷のおかげである。司馬遷は『史記』の「遊侠列伝」や「刺客列伝」の中で侠の精神を紹介している。司馬遷が生きた前漢武帝の時代は、儒教が国教化され、士大夫の倫理体系として徐々に支配的な力を及ぼすようになった時期である。実は司馬遷自身、前漢の大儒として有名な董仲舒の弟子であり、儒学の観念に大きな影響を受けざるを得なかった立場にあった。それにも拘らず、侠についてわざわざ伝を立て書き残したところに司馬遷の歴史家としての偉大さがある。

侠は、正統たる儒学からすると、儒教的秩序から逸脱するものであったから全く評価されるべき対象ではなかった。儒学は家父長制をもとにして身分的・国家的秩序を形成する学問であったから、そうした秩序から逸脱する侠はもちろん非難の対象であった。例えば、「士は己を知る者の為に死す」（『史記』刺客伝）という言葉が秩序から逸脱しているのは明らかである。司馬遷の『史記』に描かれている侠人たちの行動をみても分かる通り、この「己を知る者」とは、主君のことでなければ家父長のことでもない。本来は、縁もゆかりもない人なのである。侠とは、その縁もゆかりもない人でも己を知ってくれるのであれば命も惜しまないという激しい心情なのである。刺客の一人である予讓は、「国士もて我を遇す、我故に国士もて之に報ず」（『史記』刺客伝、予讓）という名言を吐いているが、それは侠の心情を一言で表現した言葉なのである。

侠は儒と異なり、学問として体系化されることはなかった。道教と同じく民情の古層とも言うべきものだが、理論化、合理化できないものなのである。侠は非合理であり、荊軻を燕の太子丹に推薦した田光先生が自刃する逸話は、合理的には理解できず、侠の精神でもって共感することしかできないのである。これこそ侠が学問として体系化されなかった大きな要因だと考えられる。

侠を「学問上の基底的事実」にしていたと考えられる学者は、明の李卓吾である。李卓吾は、「童心」、すなわち偽りなき真心こそが最も大事なものであると説いた。これは侠に通ずる精神である。李卓吾は、『焚書』、『藏書』といった優れた書物を著し、その影響は日本にまで及んでいる。特に吉田松陰が李卓吾の著作から感銘を受けていたことは有名である。『藏書』では、孟子の言葉を引き、儒者の中では評価が低い馮道を激賞している。そこから読み取れるのは、形式的で空疎なものによって支えられた儒学的忠義という精神よりも社稷、つまり社会のほうの方が大事であるという考えである。李卓吾は、意識化の度合いの高い儒学を「学問上の基底的事実」とする儒学者たちを排撃しようとした学者であった。

意識化の度合いが高いもののみを「学問上の基底的事実」にすることは累卵の危うさである。アメリカの社会学者ロバート・マートンは、『社会理論と社会構造』の中で「合理性の非合理」について述べている。合理性を積み重ねていけば、その結果は合理であるのか。答えは否である。合理性が極度に集積することは、すなわち非合理なのである。マートンは、世界恐慌を事例にしてそれを説明している。各人が合理的に経済活動を行っているは

ずであったのに、その結果は世界恐慌という非合理であった。これは「学問上の基底的事実」に関しても同じことが言えるだろう。合理的に知の大型経営化をはかり、学問を科学化するだけの学者たちは、結局、非合理なるものを産み出すに違いない。世界恐慌が起こることを予測しえた者が殆どいなかったように、そうした学者達がどのような非合理なるものを産み出すかは殆ど予測不可能である。そういう時代にこそ、意識化の度合いの低い「学問上の基底的事実」に立ち戻る必要があるのではなかろうか。私がここであげた儒や侠は十分に意識化の度合いの低い「学問上の基底的事実」になりうると考えられる。